

## 社会的コンピテンスの認知的側面と

### 情動的側面が社会的スキルに及ぼす影響

——表情の情動認知課題と

—— 自記式尺度を用いて ——

松尾 和弥・島 義弘・武儀山 珠美  
大浦 真一・福井 義一

#### 和文アブストラクト

本研究では、社会的コンピテンスの認知的側面と情動的側面が社会的スキルに及ぼす影響を検討することを目的とした。大学生九二名に對して、社会的コンピテンスの認知的側面を測定するために表情の情動認知課題を、情動的側面と社会的スキルを測定するために質問票調査をそれぞれ実施した。重回帰分析の結果、社会的コンピテンスの認知的側面と情動的側面が社会的スキルに正の影響を及ぼすという従来  
の知見を支持する結果が得られた。よって、社会的コンピテンスの認知的側面と情動的側面は社会的スキルを規定する要因であることが確認された。最後にこれらの知見を受けて今後の課題が議論された。

キーワード：社会的スキル、表情の情動認知、社会的コンピテン

#### 背景

他者と良好な関係を築くためには、社会的スキルと呼ばれるコミュニケーションの技能が要求される。社会的スキルには様々な定義があり、統一的なもの存在していない（相川、二〇〇〇）が、久木山（二〇一二）によれば、その多くが行動的な側面を強調しているという。本稿では、「基本的に観察可能で、ある人が所属する集団や文化において人づきあいが上手であると評価される行動」（久木山、二〇一二）という定義を採用した。

社会的スキルの高い者は、円滑な対人関係を営んでいることが分かっている。例えば、そのような人々は、良好な学級適応を示し（河村、二〇〇三）、他者とのコミュニケーション場面で困ることも少ない（橋本、二〇〇〇）。また、友人からのサポートを多く受けていて（堀、二〇〇九）、日々の充実感も高い（和田、二〇〇三）という。

なお、社会的スキルのような観察可能な行動が生起するためには、社会的コンピテンズと呼ばれる能力が備わっている必要がある。久木山（二〇一二）によると、社会的コンピテンズは、個人の内面で生じている観察不可能な能力であり、他者の意図

や思考を推察するといった認知的側面と、不快情動の制御といった情動的側面の二つの側面から構成されている。相川（二〇〇〇）の社会的スキルの生起過程モデルでは、認知的・情動的な処理の結果として行動が生起することから、社会的スキルは、社会的コンピテンスのような内的能力によって規定されているといえる。

上述のように、社会的コンピテンスは社会的スキルの基礎をなす能力であることから、社会的スキルに相当する行動と、社会的コンピテン스에相当する認知的・情動的な能力は、正の関連を示すと考えられる。実際、社会的スキルに関する代表的な自記式尺度であり、多様な適応的行動を測定する KISS-18 (Kikuchi's Scale of Social skill-18; 菊池、一九八八) の合計得点は、社会的コンピテンスの認知的側面や情動的側面と程度度の正の相関を示すことが確認されている（藤本・大坊、二〇〇七）。

ところで、社会的コンピテンスの認知的・情動的側面のそれぞれの測定には、しばしば自記式尺度が用いられているが、それでは前者を十分に測定できない可能性がある。例えば、平賀（二〇〇三）は、社会的コンピテンスの認知的側面を自記式尺度による自己評定だけでなく、他者評定でも測定した結果、両者は無相関であることを報告した。小川・松尾（二〇一四）は、社会的コンピテンスの認知的側面の客観的な測定方法として実

験的課題を使用し、自己評定との関連を検討した結果、両者は負の相関を示すことを明らかにした。

これらの結果から、自己評定された社会的コンピテンスの認知的側面は実際のスキルを反映しておらず、内容的妥当性が低いことが考えられる。その原因として、社会的コンピテンスの認知的側面が他者の意図や思考の推測に関するスキル（久木山、二〇一二）であることが挙げられる。推測した結果は、相手に確認したり、相手からのフィードバックを得たりしなければ、その正確性は不明なままである。そのため、自身の社会的コンピテンスの認知的側面の自己評定は、実際のスキルの巧拙ではなく、単に自身のスキルに対する主観的な思い込みを反映している可能性がある。

それに対して、社会的コンピテンスの情動的側面の測定については、そもそも自己評定と客観的指標との関連を検討している研究に乏しい。しかし、自己評定された情動制御方略の個人差は、否定的なフィードバックを受けた後に行った課題のパフォーマンス (Rattary & Bizer, 2009) や、聴衆の前で行うスピーチのようなストレスフルな体験をしている際の唾液中の cortisol 濃度 (Lam, Dickerson, Zoccola, & Zaldívar, 2009) を予測することが確認されている。

さらに、自己評定された社会的スキルも、客観的指標と関連があり、一定の妥当性が確認されている。例えば、自己評定で

社会的スキルが高いと回答した者は、初対面でも会話を維持・展開しようとする傾向が高く、他者評定でも社会的スキルが高いと評定された（谷村・渡辺、二〇〇八）。また、関係継続の予期がない他者に対しても積極的に会話をを行うことが確認されている（木村・磯・大坊、二〇〇四）。これらの結果は、自己評定による社会的スキルが、実際のコミュニケーション場面での適応的な行動を予測していることの証左であるといえる。

以上のように、社会的コンピテンスの情動的側面と社会的スキルそれぞれの自己評定には、一定の妥当性があることが担保されており、個人差の検討においても有用であると考えられる。

しかし、認知的側面については、自己評定よりも客観的な測定方法が求められる（平賀、二〇〇三）。そこで、本研究では、認知的側面を測定する客観的な課題として、表情の情動認知課題に着目した。表情は意図や情動を伝える役割を多分に担っていることから、他者の意図や情動を推測する際の有用なツールとして用いられている。さらに、表情の情動認知のトレーニングを行うことで行動面での変化も生じる（Penton-Voak et al., 2013）。ことから、表情の情動認知は社会的コンピテンスの認知的側面の一部を規定していると考えられる。

そこで本研究では、表情の情動認知課題と自記式尺度を用いて、社会的コンピテンスの認知的側面と情動的側面が社会的スキルに及ぼす影響を検討した。本研究の仮説を以下に述べる。

社会的コンピテンスの認知的側面を測定する表情の情動認知は、適応的な行動を規定することが示されている（Penton-Voak et al., 2013）ため、社会的スキルに対して正の影響を及ぼすと予想した（仮説一）。また、情動的側面も、社会的スキルと正の関連を示すことが確認されている（藤本・大坊、二〇〇七）ことから、情動的側面も社会的スキルに正の影響を及ぼすと予想した（仮説二）。

## 方法

**参加者** 大学生一〇八名（男性二七名、女性八一名）が参加した。社会的スキルの測定と表情の情動認知実験は異なる文脈で実施され、データは個人情報取得しないように暗証番号によって照合された。最終的に、大学生九二名（男性二三名、女性六九名、 $M_{age} = 20.44$ 歳、 $SD = 1.54$ ）のデータを分析に使用した。なお、本研究で用いた表情の情動認知のデータは、島他（二〇一一）と同一であった<sup>(2)(3)(4)(5)</sup>。

**尺度構成** 社会的スキルを測定するために、菊池（一九八八）の KISS-18 を使用して、合計得点を得た。各項目に対して、五件法（「いつもそうでない」(一点) ~ 「いつもそうだ」(五点)）で回答する尺度であり、得点が高いほど、社会的スキルが高いことを示す。

社会的コンピュータンスの認知的側面については、PCによる表情の情動認知課題によって測定したのに対し、情動的側面は自記式尺度によって測定された。具体的には、久木山（二〇〇二）の情動コンピュータンス尺度を使用して、合計得点を得た。本尺度は、Sarni（1999）の情動コンピュータンス理論に基づいて幅広い情動制御を測定するために作成されたものである。各項目に対して六件法（「全くあてはまらない」（一点）〜「非常にあてはまる」（六点））で回答する尺度であり、得点が高いほど、情動コンピュータンスが高いことを示す。

### 表情の情動認知課題

**装置** 刺激の呈示、および実験参加者の反応の収集にはHTTACHI社製のパーソナルコンピュータ SDA6-XC5511100（Windows XP）を用いた。刺激の呈示とデータの収集にはCedrus社製の心理学実験刺激呈示プログラム SuperLab Pro.4.0が用いられた。

**刺激** ATR顔表情データベース DB99（ATR Promotions, 2006）より、三名のモデル（男性二名、女性一名）が表出している十表情（ニュートラル表情、喜び（閉口）、喜び（開口）、悲しみ、恐怖、驚き、怒り（閉口）、怒り（開口）、軽蔑、嫌悪）からなる計三〇枚の表情画像を実験に使用した。各表情刺激は

鳥他（二〇一二）と同一であり、それぞれ一致する情動（表情と一致する情動）が最も強く読み取られやすいことを基準に予備実験で選ばれた。

なお、表情の情動認知課題では、一つの表情に対して複数の情動の表出強度を尋ねる評定尺度法を用いた。評定尺度法では、複数の情動語を用意しておき、呈示した表情における各情動の表出強度をリッカート形式で評定させた。この方法では表情の情動認知を量的に測定し、詳細に検討することができる（鈴木、二〇〇一）ことから、その個人差を明らかにする上でも有用であると考えられた。そこで、各表情に対して七つの情動語（幸せ、悲しみ、恐怖、驚き、怒り、軽蔑、嫌悪）を設定した。

**試行数** 三〇枚の表情画像と七つの情動語をそれぞれ組み合わせ、二一〇試行の刺激セットを作成した。実験ではそれらを二回ずつ繰り返して、計四二〇試行実施した。

**手続き** 実験は個別に行われ、一人当たりの実施時間は三〇分程度であった。まず画面中心に注視点（十）が500ms呈示され、次に三〇枚の表情画像のうちのいずれか一つが500ms呈示された。表情画像消去後に、七つの情動語の中からいずれか一つが呈示され、実験参加者は当該情動が表情画像にどの程度表れていたかを六件法（「Ⅰ 全く表していない」から「Ⅵ 非常によく表している」）で評定し、できるだけ速く該当するテンキーを押すことが求められた。実験のタイムスケジュー

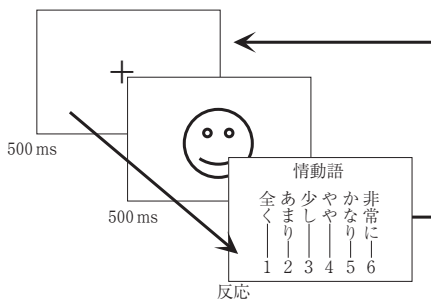


Figure 1 実験のタイムスケジュール

ない情動（表情と一致しない情動）を低く評定していることを意味する。つまり、この得点の高さは、呈示された表情と他の表情を正確に弁別して認知している程度を表している。

表情の情動認知得点Ⅱ（一致する情動の評定値／一致しない情

動の評定値の合計）× 100（6）

動を Figure 1 に示した。なお、表情画像と情動語は各試行でランダムに呈示された。

**変数作成** 表情の情動認知の個人差を検討する変数として、Parker, Taylor, & Bagby (1993) の表情の情動認知得点 (facial expression recognition score) を用いた。以下に示したように、表情の情動認知得点は、得点が高いほど一致する情動を高く、一致し

## 結果

各下位尺度の基礎統計量と信頼性係数の算出

まず、社会的スキルと情動コンピテンスの基礎統計量と信頼性係数 (Cronbach の  $\alpha$  係数) を算出した (社会的スキル:  $M = 53.86$ ,  $SD = 13.48$ ,  $\alpha = .93$ ; 情動コンピテンス:  $M = 118.36$ ,  $SD = 19.64$ ,  $\alpha = .93$ )。以下の尺度においても高い内的整合性が得られた。

表情の情動認知得点に対する一サンプルの  $t$  検定と操作チェック

実験参加者九二名の表情の情動認知得点の平均値と標準偏差を算出し、Table 1 に示した。ニュートラル表情には一致する情動が存在しないため、算出しなかった。また、喜びと怒りの表情の情動認知得点は、閉口と開口の結果にほとんど違いがなかったことから、閉口と開口の結果を平均した得点を用いた。表情の情動認知得点は、喜び・驚き・悲しみ・怒り・軽蔑・恐怖・嫌悪の順に高かった。各表情が弁別されている程度を確認するために、一サンプルの  $t$  検定を行ったところ、全ての表情の情動認知得点が、一致する情動と一致しない情動を区別せず同じ評定を行った場合の得点 (二六・六七) と比べて高かった

Table 1 表情の情動認知得点の基礎統計量

	喜び (開口)	驚き	悲しみ	怒り (開口)	軽蔑	恐怖	嫌悪	平均
M	74.70	58.98	41.56	37.85	35.47	29.43	28.89	46.60
SD	22.43	22.11	15.03	10.41	10.58	9.08	6.52	11.82
多重比較	a	b	c	d, e	e	f	f	

注) 異なるアルファベット間に5%水準で有意差あり

(all  $F(1, 91) \geq 13.48, p < .001$ )。つまり、各表情は程度に差はあるものの、他の表情とは識別されていたといえる。次に、各表情の情動認知得点の高低と、先行研究で示されている各表情の情動認知の難易度の整合性を検討するために、表情の種類を独立変数とした一要因実験参加者内計画の分散分析を行ったところ、有意な主効果を得られた ( $F(6, 546) = 224.23, p < .001$ )。

多重比較 (Bonferroni法) の結果、大部分の表情については、他の表情の得点との間に有意差が見られたのに対して、怒りと軽蔑の間には有意差が認められなかった。喜びの得点が最も高く、他の表情との弁別が容易であるのに対して、恐怖と嫌悪の得点が低く、他の表情との弁別が困難であるという結果は、先行研究の一般的な傾向と一致していた (熊田他, 二〇一〇・洪井・繁梈, 二〇〇五)。したがって、本研究における表情の情動認知の測定には一定の妥当性があると判断した。

Table 2 社会的スキルに及ぼす影響に関する分析結果

変数名	$\beta$	SE
表情の情動認知得点	.191 <sup>†</sup>	.108
情動コンピテンス	.378***	.068
$R^2$	.158**	

\*\*\*  $p < .001$ , <sup>†</sup>  $p < .10$

注) 表情の情動認知得点は、真顔を除く9つの表情の情動認知得点の平均値を投入した

社会的コンピテンスが社会的スキルに及ぼす影響の検討

次に、社会的コンピテンスの認知的側面と情動的側面が社会的スキルに及ぼす影響を検討するために、重回帰分析を行った。表情の情動認知得点と情動コンピテンスを独立変数として、社会的スキルを従属変数として投入した。表情の情動認知得点では、多重共線性の問題を回避するために全ての表情の情動認知得点の平均値を使用した。重回帰分析の標準偏回帰係数および決定係数をTable 2に示した。有意なモデル式が得られ ( $R^2 = .16, p < .01$ )、表情の情動認知得点 ( $\beta = .19, p < .10$ ) と情動コンピテンス ( $\beta = .38, p < .001$ ) は、それぞれ社会的スキルに対して正の影響を及ぼしていた。なお、表情の情動認知得点と情動コンピテンスの交互作用項を投入したモデルも検討したが、交互作用項 ( $\beta = .01, n.s.$ ) と説明率の増分 ( $\Delta R^2 = .01, n.s.$ ) は有意ではなかった。以上より、社会的スキルは、社会的コンピテンスの認知的側面と情動的側面それぞれの主効果によって説明可能であることが分かった。



## 考察

本研究では、社会的コンピテンスの認知的側面を表情の情動認知課題によって、情動的側面を自記式尺度によって測定することで、社会的コンピテンスの両側面が社会的スキルに及ぼす影響を検討した。

まず、表情の情動認知得点の操作チェックを行った結果、各表情は他の情動を表出した表情と弁別がなされており、喜びの表情の情動認知得点が最も高いのに対して、恐怖と嫌悪は低いことが分かった。表情によって情動認知の困難さが異なることは先行研究でも指摘されており (Suzuki, Hoshino, & Shigenasu, 2006)、本研究の結果は概ね先行研究と一致していた (熊田他、二〇一一・洪井・繁樹、二〇〇五) ことから、表情の情動認知得点が、認知的側面の巧拙の測定において、妥当な指標であることが示唆されたといえよう。

なお、喜びの表情は、「喜びの優位性」とも呼ばれ (鈴木・星野・繁樹、二〇〇三)、生後三か月の時点でも他の表情と区別されることが分かっている (Young-Browne, Rosenfeld, & Horowitz, 1977)。よって、本研究でも他の表情との弁別が容易であったため、表情の情動認知得点が高くなったと考えられる。

一方、恐怖と嫌悪の表情は、特に日本人において情動認知の正答率が低いといわれており (木村、二〇一一)、恐怖は驚き、嫌悪は怒りと誤って判断されやすい (Russel, Suzuki, & Ishida, 1993; Yik, & Russell, 1999)。本研究においても同様の判断の混同が生じたことで、恐怖と嫌悪の表情の情動認知得点が低かったと考えられる。軽蔑を除く喜び・驚き・悲しみ・怒り・恐怖・嫌悪は「基本六表情」と呼ばれ、離散的な特徴をもっているという (竹原、二〇〇四)。しかし、日本人は恐怖と嫌悪のカテゴリが他の表情と比較してそれほど明確ではない可能性が指摘されている (洪井・繁樹、二〇〇五)。これらのことから、恐怖と嫌悪は他の表情との混同を招きやすく、その結果、両者の表情の情動認知の正確性が下がったのかもしれない。いずれにせよ、これらの結果は、先行研究と一致しているため、表情の情動認知得点の算出方法や、信頼性や妥当性について、特に瑕疵はないものと考えられた。

次に、表情の情動認知得点と情動コンピテン스가社会的スキルに及ぼす影響を検討した結果、表情の情動認知得点は社会的スキルを高めており、表情をより正確に弁別している者は社会的スキルが高い傾向にあった。

よって、仮説一は支持されたといえる。相手の情動が上手く理解できない場合、相手の感情を逆なでするような行動を選択してしまう可能性がある。被虐待経験者など、他者の情動を理

解するための重要なチャンネルの一つである表情を弁別することが困難とされる人々には、しばしば行動上の問題があることが指摘されている (Anthony-samy, & Zimmer-Gembeck, 2007)。そのため、表情を正確に弁別できることは、適応的な行動と関連していると考えられる。特に、本研究で使用した表情刺激は、一致する情動は強く、一致しない情動は弱く読み取られやすいものであった。それにも関わらず、一致する情動を弱く、一致しない情動を強く読み取ってしまう人々は、日常の対人場面においても誤った形で情報を入力し、その結果として誤った行動を出力している可能性があるだろう。

社会的コンピテンスの情動的側面は、強く社会的スキルと関連していた。したがって、仮説二も支持されたといえる。他者との相互作用の中でしばしば生じる不快情動は、攻撃行動を招きうることが示唆されており (松尾・新井, 一九九七)、不快情動を制御できない児童は臨床現場でもしばしば問題となる (大河原, 二〇一五)。反面、そのような情動を上手く制御することができれば、理性的な行動を阻害する要因を排除することができる。

しかし、両者の関連が強かったのは、どちらの測定にも自記式尺度を用いたことが原因であるのかもしれない。複数の変数の測定に自記式尺度を用いた場合、回答者が自身の回答に整合性を持たせようとそれぞれの設問に一貫した回答を行う共通方

法バイアス (Common method bias: Donaldson & Grant-Vallone, 2002) が生じうる。その結果、真の相関係数よりも高い値が得られてしまう。社会的コンピテンスの情動的側面と社会的スキルは、どちらもパフォーマンスに関する変数であることから、共通方法バイアスを招きやすかったのかもしれない。これについては、今後、両者を異なる方法で測定した上で、本研究のモデルの再現性を確認すべきであろう。

最後に、本研究の限界を述べる。表情の情動認知の正確さは刺激や課題内容に大きく影響されることが指摘されている (瀬谷, 一九七七)。本稿ではATR顔画像データベース DBS9 (ATR Promotions, 2006) の表情刺激を500 msで呈示し、リックカート形式による評定を求めているが、他の表情刺激や呈示時間、課題を実施することで、本研究とは異なる結果が得られる可能性も十分に考えられる。実際、被虐待経験が表情の情動認知に及ぼす影響は、呈示時間によって異なることが示されている (松尾・福井・島, 二〇一五)。したがって、今後は本研究とは異なる刺激や課題呈示を用いた検討も必要であろう。

加えて、本研究では、仮説通り表情の情動認知得点が社会的スキルに対して正の影響を及ぼしていたが、その影響は有意傾向にとどまっており、重回帰式の決定係数も小さかった。表情の情動認知得点と情動コンピテンスは無相関 ( $r = -1.5, n.s.$ ) であり、両者の交互作用項も有意ではなかったことから、表情



の情動認知得点の影響の弱さに、情動コンピテンスとの相関が関与しているとは考えにくい。このことは、表情の情動認知の正確さが社会的コンピテンスの認知的側面の一部を反映しているに過ぎないせいかもしれない。社会的コンピテンスの認知的側面は、本研究で扱った表情だけでなく、姿勢や声、文脈といった様々な水準の情報が入力によって成り立つことが想定される。よって、それらの一つの成分に過ぎない表情の情動認知が社会的スキルに寄与する程度は相対的に小さかったのかもしれない。今後は、他の水準の情報入力も含めた統合的なモデルを構築することで、社会的スキルを構成する各水準の重みづけの違いなども検討していくべきであろう。

註

(1) 本研究は、第五著者の前任校で実施された。当時その前任校では、研究倫理委員会が存在していなかったため、本研究の実施に当たり、倫理委員会の承認を受けることができなかった。そのため、倫理的に十分な配慮を行った上で実験と調査を実施した。具体的には、各参加者には、あらかじめ研究目的、研究への参加が自由意思であること、途中辞退が可能であること、個人情報管理が徹底していることを口頭と書面で説明し、承諾の得られた者に対してのみ、実験への協力を求めた。

(2) 本稿および鳥他(二〇一二)のデータは、第五著者が前任校にお

いて、第二著者とともに収集したものである。第五著者の異動によって、表情の情動認知に関する研究が一時中断していたが、研究を再開するにあたって、第一著者が加わり、本稿におけるデータの分析と執筆において大きな役割を担った。

(3) 本研究と鳥他(二〇一二)では、使用尺度が異なっており、それぞれの尺度で欠損値の数が異なっていた。そのため、本研究と鳥他(二〇一二)では、対象人数が若干異なっている。

(4) 本研究と鳥他(二〇一二)は、当時、わが国では未検討であった、被虐待経験と愛着が表情の情動認知に及ぼす影響について探索的に検討するために実施された研究プロジェクトの一部が論文文化されたものである。当プロジェクトでは、被虐待経験と愛着、社会的スキル、自尊心、精神的健康、対人恐怖、情動コンピテンス、ノンバーバル・スキルに関する尺度を測定していた。これらのデータを用いた新たな知見に関しては、本稿と鳥他(二〇一二)と同様、今後も順次、公表する予定である。

(5) 鳥他(二〇一二)は、愛着の内的作業モデルが表情の情動認知に及ぼす影響を検討することを目的としていたのに対して、本研究では、社会的コンピテンスの認知的側面と情動的側面が社会的スキルに及ぼす影響を検討することが目的であった両者は研究目的が異なっており、データに重複があっても本研究の独自性は担保されている。

(6) 例えば、悲しみ表情の場合、一致する情動は悲しみとなり、一致しない情動はその他の六つの情動(幸せ、恐怖、驚き、怒り、軽

蔑、嫌悪)となる。つまり、悲しみ表情の情動認知得点を算出する場合、悲しみ表情の情動認知得点Ⅱ(悲しみの情動評定値)その他の六つの情動評定値の合計×1.00となる。よって、本研究において表情の情動認知得点がとりうる範囲は2.78から1.00であった。

引用文献

- 相川 充 (2000). セレクション社会心理学 20 人つきあいの技術——社会的スキルの心理学——サイエンス社
- Anthonyasamy, A., & Zimmer-Gembeck, M. J. (2007). Peer status and behaviors of maltreated children and their classmates in the early years of school. *Child Abuse & Neglect*, 31, 971-991.
- Donaldson, S. I., & Grant-Vallone, E. J. (2002). Understanding self-report bias in organizational behavior research. *Journal of business and Psychology*, 17, 245-260.
- 藤本 学・大坊郁夫 (2007). コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み パーソナリティ研究、一五、三三七—三六一。
- 橋本 剛 (2000). 大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連 教育心理学研究、四八、九四—一〇二。
- 平賀明子 (2003). 社会的スキル「自己報告尺度」に関する妥当性の検討——仲間からの評定と自己評定との関連——北星学園大学短期大学部北星論集、No.1, 五七—六九。
- 堀 匡 (2009). 大学生のソーシャルサポート提供に関連するソーシャルスキルの探索 広島大学大学院教育学研究科紀要、No.58, 一六九—一七六。
- Lam, S., Dickerson, S. S., Zoccola, P. M., & Zaldívar, F. (2009). Emotion regulation and cortisol reactivity to a social-evaluative speech task. *Psychoneuroendocrinology*, 34, 1355-1362.
- 河村茂雄 (2003). 学級適応とソーシャル・スキルとの関係の検討 カウンセリング研究、三六、一一一—一二八。
- 菊池章夫 (一九八八). 思いやりを科学する 川島書店
- 木村昌紀・磯友輝子・大坊郁夫 (2004). 関係継続の予期が対人コミュニケーションに及ぼす影響 電子情報通信学会技術研究報告、一〇四(一九八)・一—六。
- 久木山健一 (2002). 情動コンピテンスと社会的情報処理の関連——アサーション行動を対象として——カウンセリング研究、三五、六六—七五。
- 久木山健一 (2012). 社会的スキルと社会的コンピテンス 速水敏彦(監修)・陳惠貞・浦上昌則・高村和代・中谷素之(編) コンピテンス——個人の発達とよりよい社会形成のために——(pp. 109-118) ナカニシヤ出版
- 熊田真宙・吉田弘司・橋本優花里・澤田 梢・丸石正治・宮谷真人 (2011). 表情認識における加齢の影響について——表情識別関の測定による検討——心理学研究、八二、五六—六一。
- 松尾和弥・福井義一・島 義弘 (2016). 表情の情動認知の関連要

因の検討 その一—呈示時間による被虐待経験の影響の変化は愛着の内的作業モデルを統制しても保存されるか?— 関西心理学会第一二八回大会発表論文集、五四

松尾直博・新井邦二郎 (一九九七). 感情と目標が児童の社会的行動の選択に及ぼす影響 教育心理学研究、四五、三〇三—三一一.

小川一美・松尾貴司 (二〇一四). 非言語情報に関する知識が表情解読の正確さに及ぼす影響——解読スキルの自己評定の妥当性検討とともに——日本心理学会第七八回大会発表論文集、一一〇.

大河原美以 (二〇一五). 子どもの感情コントロールと心理臨床 日本評論社

Parker, J. D., Taylor, G. J., & Bagby, R. M. (1993). Alexithymia and the recognition of facial expressions of emotion. *Psychotherapy and psychosomatics*, 59, 197-202.

Penton-Voak, I. S., Thomas, J., Gage, S. H., McMurran, M., McDonald, S., & Munafò, M. R. (2013). Increasing recognition of happiness in ambiguous facial expressions reduces anger and aggressive behavior. *Psychological Science*, 24, 688-697.

Ratney, J. N., & Bizer, G. Y. (2009). Negative feedback and performance: The moderating effect of emotion regulation. *Personality and Individual Differences*, 47, 481-486.

Russell, J. A., Suzuki, N., & Ishida, N. (1993). Canadian, Greek, and Japanese freely produced emotion labels for facial expressions. *Motivation and emotion*, 17, 337-351.

Sarni, C. (1999). *The development of emotional competence*. New York: The Guilford Press.

佐藤 弥・魚野翔太・松浦直己・十二元三 (二〇〇八). 非行少年における表情認識の問題 映像情報メディア学会技術報告、三二(四三)の1—16.

瀬谷正敏 (一九七七). 対人関係の心理 培風館

洪井 進・繁榎算男 (二〇〇五). 表情の二次元空間配置モデルの検討 心理学研究、七六、一一三—一二二.

鳥 義弘・福井義一・金政祐司・野村理朗・武儀山珠実・鈴木直人 (二〇一四). 内的作業モデルが表情刺激の情動認知に及ぼす影響 心理学研究、八三、七五—八一.

鈴木敦命・星野崇宏・繁榎算男 (二〇〇三). 項目反応理論にもとづく顔表情認知能力の測定 日本行動計量学会大会発表論文抄録集、三二の1—三三四—三三七.

Suzuki, A., Hoshino, T., & Shigemasa, K. (2006). Measuring individual differences in sensitivities to basic emotions in faces. *Cognition*, 99, 327-353.

鈴木直人 (二〇〇一). 感情・情緒 (情動) の伝達と測定 濱治世・鈴木直人・濱保久 新心理学ライブラリー七 感情心理学への招待——感情・情緒へのアプローチ—— (pp. 137-174) サイエンス社

竹原卓真 (二〇〇四). 顔の表情と認知 竹原卓真・野村朗 (編) 「顔」研究の最前線 (pp. 61-83) 北大路書房

谷村圭介・渡辺弥生 (二〇〇八). 大学生におけるソーシャルスキルの

投稿論文

自己認知と初対面場面での対人行動との関係 教育心理学研究、  
五六、二六四―三七五。

和田 実(二〇〇三)、社会的スキルとノンバーバルスキルの自己認知  
と心理的適応の関係 カウンセリング研究、三六、二四六―二五  
六。

Yik, M. S. & Russell, J. A. (1999). Interpretation of faces: A cross-cultural  
study of a prediction from Fridlund's theory. *Cognition & Emotion*,  
**13**, 93-104.

Young-Browne, G., Rosenfeld, H. M., & Horowitz, F. D. (1977). Infant dis-  
crimination of facial expressions. *Child Development*, 555-562.

(ま)お かずや・臨床心理学)

(しま よしひろ・発達心理学・パーソナリティ心理学)

(む)ぎやま たまみ・臨床心理学)

(お)おうら しんいち・臨床心理学)

(ふ)くい よしかず・臨床心理学)

## **Effects of cognitive and emotional aspects of social competence on social skills:**

### **Using of facial emotion recognition task and self-report questionnaire**

#### **Abstract**

The purpose of this study was to examine the effects of cognitive and emotional aspects of social competence for social skills. In this study, 92 university students completed the self-report questionnaire for measuring social skills and emotional aspects of social competence, and the facial emotion recognition task for measuring cognitive aspects of social competence. Multiple regression analysis supported previous research that showed that cognitive and emotional aspects of social competence have positive effects on social skills. The results suggested that cognitive and emotional aspects of social competence are factors contributing to social skills. Further directions for research in this area were discussed.

Keywords: social skill, facial emotion recognition, social competence